

MOVE the NEXT動かす、次代。広げる、未来。>

JIMHニュース

第14号

国際物流総合展2024 報告

機種別部会・全体勉強会

第14期 マテハン塾 基調講演・特別講演

タイ物流システムロボット人材育成支援事業への協力

中国機械工程学会 (CMES) 来日

経済産業省 中小企業庁事業

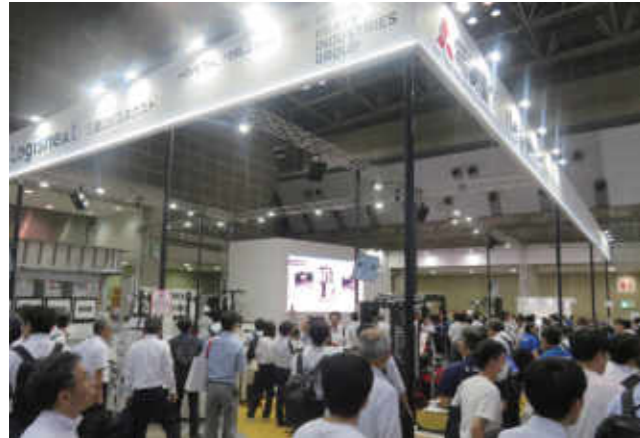
新入会員企業紹介／2025国際ロボット展告知

物流への関心が高まりを見せる2024年の開催で 空前の来場者数8万4,193名を記録



当協会会員45社を含む580社が出展参加

国際物流総合展2024 第16回Logis-TechTokyoが9月10日(火)～13日(金)の4日間、東京ビッグサイト東ホールで開催されました。主催団体の一角を担う当協会の会員企業も45社が出展されました。



盛大な賑わいを見せる展示フロアの様子

初日の開場前には開会式が開催され、冒頭、国際物流総合展2024 実行委員会委員長、(株)ダイフク 取締役常務執行役員 イントラロジスティクス事業部門 事業部門長 信田浩志氏が登壇し挨拶、概要は以下の通りです。

「本展示会は、1994年の第1回以来、2年に1度、物流ロジスティクスの専門展示会として開催し、今回は第16回目となります。今回の参加者数は580社、3,241ブースという過去最大規模での開催となりますこと、実行委員会を代表して御礼申し上げます。



信田浩志実行委員会委員長

引き続き物価の上昇、少子高齢化と、社会環境が大きく変化する中、物流ロジスティクスも岐路を迎えており、物流の2024年問題を乗り越え、持続可能な物流の未来を実現するために、本展示会のテーマは「持続可能な物流の

明日をはぐくむ」としました。それに伴い、課題解決のための最新の情報の提供、セミナー、フォーラムを多数予定しており、それらを通じて日本産業・経済のさらなる発展、持続可能な社会の実現への寄与をできればと考えています」

続いて主催団体を代表し、(一社)日本能率協会 会長 中村正己氏が登壇し、以下の要旨で挨拶しました。

「振り返れば国際物流総合展は、晴海の見本市で誕生し、幕張メッセで育てていただき、そしてこの東京ビッグサイトで過去最大規模の開催を実現しました。2024年問題の解決に向けたヒントはこの会場の中に全て詰まっています。今日から4日間、数万のバイヤーが来場される、このリアルに勝るものはありません。見ていただき、触れていただき、感じていただき、そして、しっかりとビジネスをしていただく。そんな4日間となりますことを確信いたしまして挨拶とさせていただきます」



中村正己日本能率協会 会長



開会式テープカットの様子。左から、(一社)日本能率協会 会長 中村正己氏、(一社)日本物流システム機器協会 会長 下代博氏、(一社)日本パレット協会 会長 二村篤志氏、(一社)日本産業機械工業会産業機械第2部部长代理 高村直樹氏、国際物流総合展2024実行委員会委員長 (株)ダイフク 取締役 常務執行役員イントラロジスティクス事業部門長 信田浩志氏、(一社)日本産業車両協会 会長 御子神隆氏、(一社)日本運搬車両機器協会 副会長 大野雅隆氏、(公社)日本ロジスティクスシステム協会 副会長 三枝富博氏

式は続いて各主催団体代表者が登壇し、オープニングを記念してのテープカットが執り行われ、華々しくイベントの幕を開けました。

2024年問題というピンチをチャンスに

開催初日の9月10日(火)には、展示会の終幕後に開会レセプションが開催され、レセプションのオープニングでは各主催団体の代表が紹介され、当協会からは下代会長が登壇しました。



レセプションのオープニングで登壇した主催団体代表。写真左から、(一社)日本能率協会 専務理事 小宮太郎氏、(公社)日本ロジスティクスシステム協会 副会長 齋藤充氏、(一社)日本物流システム機器協会 会長 下代博氏、(一社)日本パレット協会 専務理事 宿谷肇氏、(一社)日本産業車両協会 会長 御子神隆氏、(一社)日本産業機械工業会産業機械第2部部长代理 高村直樹氏

各団体代表の登壇・紹介に続いては、主催団体を代表して、(一社)日本能率協会 専務理事の小宮太郎氏が挨拶、概要は以下の通りです。

「本日は大変お忙しい中、国際物流総合展2024にご出展、並びに開会レセプションにご参加を賜りありがとうございます。おかげ様で初日は1万4,459名という、一昨年比で約150%の方々にご来場をいただきました。例年の右肩上がりに最終日まで増えて行く傾向から、今後さらなる期待に胸を膨らませております。



小宮太郎日本能率協会専務理事

物流業界取り巻く環境は激変しておりますが、物流関係の皆様方が集まるこの場においては、ピンチをチャンスに変えてと、悲観的になることなく、この物流を支え、変化していく覚悟を持って、この会を進めてまいります」

挨拶に続いては(公社)日本ロジスティクスシステム協会 副会長 齋藤充氏が乾杯の発声で登壇しました。

「開催初日は多くの皆様にお越しいただき大変嬉しく感じております。改正物流2法の施行、また同法に基づく基本方針や、荷主物流事業者に対する規制措置の施行に



齋藤充日本ロジスティクスシステム協会副会長による乾杯の発声

向けた検討を行う合同会議の開催など、我が国では、物流の高度化・革新が急速に進みつつあり、同改正法におきまして、特定事業者のうち荷主には、物流統括管理者の設置が義務付けられる等、物流関係者には持続可能な物流実現に向けた対応が求められて参ります。そうした課題解決の手段として、省力化、省人化設備の導入や、生成AI・デジタル技術を用いたロジスティクス・物流の効率化が必要不可欠であり、その意味でも本展示会は極めて大きい役割を担うものであり、本展示会が関係者の皆様にとり有意義なものとなるように祈念し、乾杯の音頭をとらせていただきます。それではご唱和賜りたいと思います、乾杯!

*

国際物流総合展2024は、初日から最終日まで4日間とも晴天に恵まれ、来場者は日を追うごとに増加を辿り、全日程合計で8万4,193名と前回(2022年)の約1.4倍という圧倒的な数字を記録、盛況裡に閉幕を迎えました。

なお、今回の国際物流総合展では過去最大規模の出展数に上ったことから、これまで展示会場内の一角に設置されていた主催者団体・組織のブースを、主催団体情報発信コーナーとして集約、当協会のブースもコーナー内に設置されました。



主催団体情報発信コーナーの様子

●IHI物流産業システムのブースはハードよりソフトに注力した出展で、ロボット等を統合的に制御するソフトLSync（エルシンク）を前面にアピール。物流センターの様々な工程の中でそれぞれ独自に稼働するAMRやアーム型ロボットや各種ピッキングシステム等を、全体フローの中でスムーズかつシームレスに一つの頭脳でコントロールしようというコンセプトで、フロアに異なるメーカーのAMRが縦横無尽に走行するリアルなデモを公開しました。



●TOPPANグループのアイオイ・システムは、5.7GHzマイクロ波を用いて、無線で電力を供給する新技術の参考出品も注目を集めました。製品出展で主役を務めたのはGTPソリューションのAGV×プロジェクトンピッキングシステム®。AGVが運んで来た棚の在庫をRFIDが自動読み取りし、最大170インチ投影可能なプロジェクターを用いてピッキングするシステムで、TOPPANと共同し、物の管理、人とロボットをつなぐ管理をご紹介します。



●「物流波動はもう怖くない～現場に合わせてマルチに。そしてフレキシブルに。」のキャッチコピーで出展したイシダは、計量検品機能搭載のピッキングカートで約15年ぶりに4世代目にフルモデルチェンジしたサイマルカートのV4のラインナップから、3秤タイプ、4秤タイプそして最新追加バージョン8秤タイプの3モデルを展示。多品種少量のEC需要を想定して追加された8秤にはナロータイプの縦置きとワイドな横置きがラインナップされます。



●コンピュータ並びに周辺機器のソフト&ハードの開発製造を手掛けるイーソル（SD事業部）は、同社の幅広いラインナップを一堂に展示する中で、冷凍倉庫のマイナス30度でも使用可能な耐環境ハンディターミナルおよび耐環境アクセスポイント等を前面にアピール。それらの延長線上に、最近ニーズが高まりを見せるフォークリフトへの業務効率化機器としてタブレットや無線カメラ等のユニット装備専用アタッチメント等の金具等も展示しました。



●「運び方改革で働き方改革」をメインキャッチに掲げる伊東電機が今回注力したのはソフトウェア技術のアピール。MDRを基軸に据えたハードウェアを最大限有効に活用するためのソフトウェアと融合させた技術を象徴するのがid-DVTです。デジタルツインを搬送自動化システムに取り入れることで正確な仕分け、奇麗な搬送を実現し、万一不測のトラブルが発生した場合でも物流を止めずにしっかりと機能するのはソフトウェア技術があればこそです。



●サプライチェーンの最適化に向けてトータルソリューションで倉庫の自動化を提案するExotec Nihonは今回、東芝テック・住友商事との共同出展にトライしています。多様なコラボレーションを通じて自社ビジネスを成長させるビジョンは、同社がこれまで導入実績を重ねて来たところで、日本における周知の段階から今後はSkypod中心に総合インテグレーションにより市場を牽引していくフェーズに突入した事を表しているようです。



●製品ラインナップを幅広く展示する岡田工業のブースで注目されたのは、従来からの基本ラインナップながら、これまで展示会等での実物展示はされて来なかったユーロタイプの1200×1000対応のネスラックシリーズ。国内においては11型パレット標準化の流れが定まる一方、グローバルなサプライチェーンに目をやれば、欧米からの入荷パレットを積み替え不要で保管できるメリットは依然強いことから、需要をリサーチする方針とのことでした。



●オカムラのブースではパレット品およびピース・ケース品の自動化ソリューションを展示。パレットソリューションでは9月にリリースしたばかりのサイビスターの自動倉庫タイプを早くも出展、従来フォークリフトが担っていたラックへのパレット入出庫をスタッカークレーンが行うことで作業効率が大幅にアップ。また入出庫ステーションへの搬送も同社オリジナルAMRのORVが行うという、一歩進んだ自動化のデモンストレーションを行いました。



●人とロボットの調和をコンセプトに掲げるオークラ輸送機のブースで、パレット搬送のAGVや高速のピッキングシステムのピカトル2等の展示と並び注目を集めた最新ソリューションが、段ボールケース開梱システムのRandomEasyOpener。独自の Cutter 刃で中味を傷つけずスピーディに連続開梱する機器は、日雑卸最大手のPALTACと技術提携し、同社が30年来自社施設内で運用していた機器をベースにオークラが設計製造・販売するものです。



●AutoStore Systemは、R5Pro™という新ソリューションを日本でお披露目しました。日本製の高精度なりチウムチタン酸バッテリーを搭載することで急速充電が可能になったのが従来モデルからの最大の進化ポイント、大規模化・高速化を要望する顧客向けに開発したもので、24時間連続稼働でオペレーションするのにも適したソリューションです。具体的には7分の充電で180分稼働可能なため、実質的にエンドレスの運用を実現しています。



●オーワックジャパンの展示する機器は、廃棄物処理を一気通貫でコンパクトかつ効率的に行え、従来人手に頼っていた作業を機械化した製品群です。物流の現場で大量に発生する段ボールごみを圧縮して容積を五分の一程度にまで圧縮することで、人手で畳む手間が省けると共に回収頻度を縮減することで、回収車のバス占有時間も大幅に削減、トータルの物流時間を捻出してくれる製品群の中でも今回展示されるBRICKMAN1200は注目新製品です。



●オムニヨシダは、物流業界が抱える2024年問題で問題視されるトラック運転手の労働時間短縮を視野に、倉庫におけるパレットの積み替え作業を機械化・自動化することで省人化・省力化を図るソリューションのパレスルーを中央にデモ展示しました。これまでも多くの企業様に導入頂いているMH機器ですが、今後益々需要が高まるとの市場動向予測に基づき、パレットの条件が悪い場合でも運用の可能性を拡げるクランプ機能を新規追加しています。



●Robowareを展開するGaussyの展示ブースでは、仕分けと搬送と棚搬送までの全部の工程を同社が一括してソリューション提供できる点をアピールする展示。棚搬送ロボットとしてMushinyのT6を、搬送・ピッキング・仕分けの3工程で使えるAMRとしてFlexシリーズ各機種を、さらに機能を随時アップデートする立体型仕分けロボのオムニソーターを展示しました。自社開発したソフトウェアで中国メーカー製品の日本での運用をスムーズ化しています。



●キーエンスのブースでの注目新商品はSTシリーズとDX-A800シリーズの2機種で、STシリーズはスキャントンネルシステムで、主に仕分け装置で使われるコードリーダー、読み取り装置です。もう一つのDX-A800はフルスクリーン型のハンディターミナルで、業務用ハンディとしてはかなり薄い筐体が特徴ながら、衝撃耐性が求められる物流現場を考慮してマグネシウムダイキャストを内蔵する等で構造を強化、外部電池交換可能な仕様としています。



●ギークプラスは日本初公開の新製品を出展、棚搬送型ロボットメーカーの印象が強かった同社ですが、フォーウェイシャトルソリューションはそのイメージを刷新するもので、ストレージの1階層部分にピッキング効率の高いAGVを、2階層以上に保管効率の高いRGV方式を導入することにより、高いスループットと保管効率の両方を同時に実現させた画期的な仕組みで、非稼働時に引き当てパレットを1階層部に下ろすことで効率的なピッキングを実現しました。



●京町産業車輛のブースでは、重量物搬送するEドライブシリーズ、つまりけん引車やアシスト装置をメインに出展しており、またそれらと別に注目を集めたのが、従来ラインナップであったハンドリフタ、昇降リフトの追加モデルであるブラックリフトで、全体的にカラーを黒色化したことでスタイリッシュさを増し、好みの問題ばかりでなく、仕様環境で極力目立たない色にしたとのニーズにも応える製品でBHL350とBHL500をラインナップします。



●モーターローラ、モータープーリ、移載製品等の開発・製造で知られる協和製作所のブースでは、DC24V対応と48V対応のPULSEROLLER® (DCモーターローラ) のデモ展示。48Vの方がトルクが強いので加速が良いことはもとより、停止時のトルクも強力でこれからの物流施設では、重いものを早く、そして正確に搬送するニーズが求められます。厳しい使用条件や精度が求められる現場や機器には48Vが頼りになりそうです。



●クレオの出展のポイントは洗浄の省人化。具体的には2024年問題の中でパレットを使った輸送が注目される中、それをしっかりと洗浄し省人化するソリューション。パレット洗浄機自体は以前からあるが、ロボットで投入するような流れは今回が初の出展、そこにも人間を介さずにオペレーションするのは同社のチャレンジであり、クレオのストロングポイントは、お客様の設置スペースや処理能力に合わせて機器をカスタマイズできる点です。



●DXプラットフォームでMH業界のデジタル化を促進するエコシステムを標榜し、各メーカーとユーザーを結ぶコンフィグラは、様々なMH機器の提案や施設内での実機構成を可視化するビジュアル・セールス・コンフィグレータというソフトウェアを動画で展示。IHI物流産業システム、椿本チエイン等、協会会員企業の機器データを取り込み、展示会用のモデルとしてデモンストレーションしました。日本における導入実績も着実に増加しています。



●サトーのブースでは、2024年問題解決のための荷主向けソリューションとして、RFID、AIを用いた入荷の仕組みを展示しました。中でも注目は、最近のトレンドであるAI+OCRで入荷作業を効率化する仕組みで、従来バーコードのない製品は目視確認、台帳への転記等で時間がかかっていたものを、最新のテクノロジーでイッキに読み取って瞬時に文字認識、さらにはQRコード化してプリントアウトするまでのプロセスを実機でデモしました。



●製造から流通まで幅広い物流フェーズにフィットする機器をラインナップする三栄マテハンのブースでは、従来より小間数を増加し、取り扱う物流機器を全方位的に展示することで同社の総合力をアピールしました。とりわけ同社製造設計の製品として定評あるタイヤラックは、運送会社等でストックする修理・交換用タイヤの仕様やサイズに合わせてゼロ設計からでき、重量&中量ラック等の定番と並び取り扱いボリュームの大きな製品です。



●「搬送をカイトキに。仕分けもカイトキに!」をキャッチフレーズに掲げる三機工業のブースでは、3方向仕分け装置Branch Ballを複数台連結させユニット化したBBソーターで一次仕分け、その後ソーティングロボットシステムのメリス・ビアンカでその先の出荷場や二次仕分けに移るといったコンセプトで、連携協調のデモ機を展示しました。BBソーターは薄物やアパレルの袋物、小さな封筒等を一台のソーターで、しかも搬送する物に優しく仕分ける構造が特徴です。



●各種自律走行型ロボットを扱うシリウスジャパンでは、物流展来場者をターゲットにピッキングアシストロボットをメインにブースを展開。自律走行型ソリューションは今後国内での導入拡大が期待できるもので、2024年問題への取り組みと解決に活用されることを目指しています。FlexSwiftは、ひとつの物流拠点で100台の導入実績があり多台数同時稼働のスペースは折り紙付き。大規模なインフラ投資不要な導入ハードルの低さも魅力です。



●住友重機械搬送システムは、限られたスペースで省人効果を求められる時代に、自動保管、自動搬送、自動ピッキングの3点すべてを製品ラインナップする同社の強みを活かし、これらの連携で入荷から出荷までの段取りや庫内作業までを自動化した無人の物流センターをイメージしてブースを構築。そのキーとなるのが今回初出展した、パレット上の一層まるごとでも1ケースのみでもピック出来る一台二役の自動ピッキング装置2way Pickerです。



●総合MHメーカーであることを前面に打ち出す**西部電機**は、物流施設内における自動倉庫から最後のパレタイザまでのオペレーションを一貫してシステムが組める同社ラインナップの一例を展示。具体的には最近のコンビニ向け物流で要望が増加傾向にある、バラ品のロボット化に応える形で、人協働ロボットによるバラのピッキングを前面に、従来人手作業に頼っていたオリコン組立て、任意の位置にラベル貼りが出る装置を紹介していました。



●**ダイフク**は「Automation of Tomorrow」をテーマにした大型シアターで、同社が思い描く“少し先の自動化ソリューション”のプレゼンテーションを実施。“完全無人化の物流センター”や半導体工場向け・自動車工場向け・空港向けの最先端システムを、立体感のあるビジュアル素材を駆使して紹介し、注目を浴びました。実機展示エリアでは最新の搬送システム6機種を展示。デモンストラクションなどで、同社が提供する幅広いソリューションを訴求しました。



●**大有**は、同社ならではの2024年問題への回答というコンセプトでブースを構成しました。廃棄物や金属部品の投入に用いる、回転フォーククランプ付き車両限定アタッチメントのオートグリッパー、台車と秤の機能をセットにして、専用スキッドを装着することで荷物を計量しながら運ぶポータリフトスケール、複数のドローりをまとめて運搬することでハンドリングを改善し作業を楽にかつスピーディにする押しドリくんがその代表的製品です。



●「物流業界における唯一無二の駆け込み寺」というのが**タクテック**のコンセプト。機械やオペレーションで発生する物流センターでの様々な悩み事について、テーマやジャンルごとに別々の会社に相談するのではなく、まとめてタクテックに相談してください、という意味を込めて銘打ったもので、全ての機器をタクテックが自社で提供するのではなく、考えに共鳴できる企業がチームタクテックとして担う体制で駆け込み寺を構成するというアイデアです。



●**橋本チエイン**は、MH機器とシステムだけでなくそれらを支える産業用部品から人の移動を支える電動アシスト3輪自転車まで、物流に関わる全てを支えるバラエティに富んだ出展で、様々な側面を余すところなく見せるのがブースのコンセプト。中でもメインに据えられるのは自社開発の国産GTPシステムT-AstroX。ユーザーの要望や独自の運用方法に沿って、個々に最適なエンジニアリングで提案できるのはメイド・イン・ジャパンならではの強みです。



●**寺岡精工**は秤メーカーならではの開発力を駆使してAMRとピッキングカートとをドッキングしたソリューションを展示。重量検品の可能なAMRは他に例のない独自の存在。4オーダーを同時にこなすピッキングカートが自律走行しながらロケーションまで移動し、作業者は歩行することなくピッキングできるばかりでなく、検品工程もスルー出来るのが最大のポイント。人手不足の時代にピッキングエリアの作業人員削減効果も見落とせません。



●物流効率化に関わる各種ソリューションを一貫して提供し続ける**東計電算**のブースでは、様々な商材、業種業態に対応した倉庫管理機能と使い勝手やUI等に同社ノウハウを凝縮したクラウド型物流向けソリューションのAWMSを展示紹介。また受注・配車・日報・売上・請求・入金までを網羅し、運送業の経営管理に必要な収支の把握を実現した販売管理システムも連携可能なWEB受注システム、ペーパーレスシステム等と並んで展示されました。



●**東芝インフラシステムズ**は、中国のロボティクスメーカーであるMushinyと共同出展し、同社の先進的な物流システムのハードウェアと、東芝のソフトウェアおよびエンジニアリング、保守に関する充実したアセットを組み合わせ、トータルで顧客へ訴求する基本コンセプトでブースを展開しました。中でも中国の国内物流経験で鍛え上げられた3Dソータはカタログスペックで1時間あたり1万4,400件というクラス最速レベルの仕分け能力を発揮します。



●自律型ケースハンドリングロボット**HaiPick System**、リニアモーター式ロボット倉庫**CUEBUS**と、自動化・省力化カテゴリでも話題豊富な**トヨタL&F**ですが、注目を集めたのは、トラック荷役対応自動運転フォークリフトです。3D-LiDAR最先端の画像認識技術を用いて、従来困難とされたトラック荷台への積み降ろしを、通常の2本フォーク1パレットのみならず、4本フォーク2パレットの実演をウイング車の両サイドをモデルに用いて正確に実施しました。



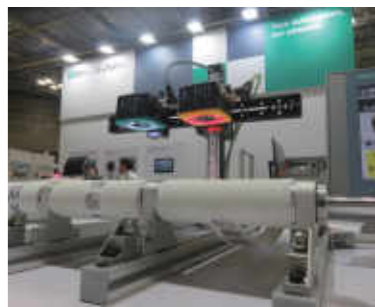
●**中西金属工業**は、単純なMH機器メーカーに止まらない構内物流のトータルコーディネーターという側面を訴求するブースを設計、まずコンテナから段ボールをデバンニングし、コンベヤから流れて来た段ボールをパレタイズ、続いてパレタイズしたパレットをAGVで搬送し保管、最終工程でストレージから出庫されたパレットをAGVが再びラックの中に潜り込んで外に出すまでの一気通貫フローを、同社ソリューションで解決できるデモを展開しました。



●**ニッタ**は、流通倉庫の業務で関連製品が役立てるシーンに注目し、従来ローラコンベヤで大型重量物を運んだ時代から、ECに代表されるような梱包形態が小さく軽量・簡素化された荷物が主流の時代になり、ローラ上で暴れたり落ちたりする問題に直面しました。コンベヤそのものの交換はコストも手間もかかることから、既存のローラに後付けできるベルトを開発しストレート・カーブ用から低温対応型まで幅広いラインナップを展示しました。



●**ピーアンドエフ**のブースで注目を集め販売実績も好調な製品はAMR、AGV用のナビゲーションセンサーです。これはLiDARやビジョンカメラで自機位置をマッピングしつつ無人でビークルを走らせる使い道に特化したセンサーで、床に貼られたコードから縦横の位置、距離、アングルからスピードまでを認識します。新型のセーフティタイプは色分けしたコードに青と赤色照明を交互に当てることで事実上コードを二重化し安全性を向上させています。



●**ホクショー**は、人手不足時代の切り札となるべく、同社の従来ソリューションであるバラ物自動仕分けシステムのPASにロボットとAGVを組み合わせることで、1人の作業員で現場オペレーションを可能としたワンマンPASのコンセプトモデルを展示し、注目を集めました。今回は監視の役割を兼ね若干の投入も担う作業員一人によるデモでしたが、将来的には投入部からシュート下まで全てを完全無人化するビジョンで開発されたものです。



●AGF、AGVのパイオニアともいえる**三菱ロジスネクスト**は、同社グループの三菱重工との共同出展でブースを構成、デジタルブランドのΣSynXという技術を用いた物流自動化・知能化ソリューションを各種展示しました。中でも注目を集めたのが、トラック自動荷役の無人フォークによるデモンストレーションと、ΣSynXの中から要素技術を取り込んだ三菱ロジスネクスト独自の自動化技術SynfoXを搭載したAMRプロトタイプの実機デモンストレーションです。



●**村田機械**は、2010年にリリースした日本におけるシャトル式自動倉庫のパイオニア的な存在ともいえるユニシャトルHPを、デビュー時以来となる展示会に出展。とはいえこれまで様々な業界ジャンルのユーザーに向け導入事例を積み重ねて来た中で、基本骨格はそのままに、常温環境のみならず冷凍環境対応としたバージョンも追加され、ストレージ側も複数のバリエーションを追加設定しており、今回はマルチタイプタイプを披露しました。



●コンベヤメーカーであると同時にロボットインテグレーターでもある**メイキコウ**最大の注目は、究極の荷役合理化装置ともいえる全自動荷卸し装置のオートマチックデバンダ。物流の2024年問題はトラックドライバーばかりでなく倉庫の荷役も過酷で深刻、同社はこれまでも半自動タイプで省力化を促進して来ましたが、今回は完全に無人のデバンニングを実現したフルオートマチック仕様、スイッチ一つで40ftコンテナの荷下ろしを完了します。



●今回の**山善**のブースは、AMRに特化した展示で統一したのが特徴。労働人口不足という構造的な課題を抱える日本では、物流は言うに及ばず中小の製造現場まで様々な現場で今後、自動搬送のニーズが高まりを見せるのは確実で、そうした現場に向け30kg搬送、300kg搬送、1.5t搬送とスケールの異なるAMRバリエーションを一堂に展示、中でも参考出品の山善オリジナルAMRはスズキ製セニアカーをベースに足回りとして開発された注目AMRです。



●**ユーシン精機**のブースでは独自の省スペースパレタイジングロボットを展示、三方を囲まれたカゴテナへの積みつけという難度の高いオペレーションを整然と遂行できるのは、同社が以前から長年手掛けて来た射出成形の取出口ロボットを製造して来たという技術的なアドバンテージの部分が大きく、ごく小さな電装部品を停止精度、位置精度を保ちつつ取り扱う経験を通じ、物流ジャンルでは異次元の正確さによる運用を実現しています。



●**リンテック**は、同社の製造設計になる電動タイプのラベリングマシンをメインに展示しました。従来エアコンプレッサを用いるのが一般的だったラベリングマシンから電動化されたことで、家庭用100V電源で稼働する身近な存在となり、さらに上流工程の封函機やコンベヤ周りまでも全て電動化することでコンプレッサ不要のラインを構成し、騒音問題も含め導入のハードルが一気に低下、新規参入EC事業者等の現場ニーズにもマッチしています。



●小型自動機器に強みとこだわりを併せ持つ**ROMS**は、自社ブースと別にダイワハウスのブースにも自社の主力製品であるナノソータを展示しました。ナノのネーミング通り、床面積が約5坪というミニマムな面積があれば設置できるコンパクトさが最大の特徴で、省スペース型の機器にもかかわらず1時間あたり700PCの仕分け能力を有し、一度の作業で約300オーダー分の仕分けが可能で、時代にマッチしたコンパクトかつハイスペックなソリューションです。



●**ワコーパレット**のブースでは、LP-WATSという位置情報測位システムに注目です。物流現場でなかなか正確な管理が難しいカゴ車や6輪カート等の搬送用ツールを、IoTデバイスを装着することで位置情報測位可能としてくれるソリューションで、5年間の通信が可能な長寿命に加え、リーダ等の追加デバイス不要で即日運用可能という導入の容易さは、イニシャルコストのかさみがちなGPSタイプ等に比べてもアドバンテージといえそうです。



国際物流総合展2025 第4回 INNOVATION EXPO

会期	2025年9月10日(水)～12日(金) 10:00～17:00
テーマ	物流を止めない。社会を動かす。
目的	内外の最新物流機器・システム・情報等のソフトとハードを一堂に結集し、交易振興・技術の向上・情報の提供・人的交流等を促進することを目的とする。
会場	東京ビッグサイト(東京国際展示場)東4～8ホール
主催	一般社団法人日本産業機械工業会、一般社団法人日本産業車両協会、一般社団法人日本パレット協会、一般社団法人日本運搬車両機器協会、一般社団法人日本物流システム機器協会、公益社団法人日本ロジスティクスシステム協会、一般社団法人日本能率協会
協賛	関連約40団体(予定)
展示予定規模	450社・団体 / 1,500小間

12月2日出展申込受付開始!



第2回 機種別部会・全体勉強会

ワンストップ梱包可能な3次元シャトル型ASRS 日本の倉庫事情にマッチしたRENATUSとは

業界最速クラス4m/秒のシャトル&昇降機

2024年度の第2回機種別部会・委員会が7月11日(木)にAP東京八重洲(東京都中央区)にて開催されました。冒頭、横田専務理事より各種報告事項の説明があり、全体勉強会に移りました。全体勉強会のテーマは「ワンストップ梱包が可能な3次元シャトル型ASRS『RENATUS』のご紹介」で、RENATUSROBOTICS(株)顧客価値創造局の堂本拓磨氏が登壇、以下の要旨で講演されました。

*

「本日は大規模倉庫においてワンストップ梱包が実現可能な国産・内製の自動倉庫システムであるRENATUSについてご紹介します。RENATUSは、業界最速クラス4m/秒のシャトルおよび昇降機、天井高まで格納可能なラック、高頻度品の滞留が可能なステーション、配車最適化アルゴリズム等々で構成された自動倉庫システムで、大規模倉庫においても渋滞せず効率よく荷合わせ～梱包までワンストップで行える点がその他のGTPとは一線を画す特徴です。



RENATUSROBOTICS(株) 堂本氏の講演の様子

開発の背景には某EC大手企業の社長との出会いがありました。当時、同社物流センターで大規模に導入した棚搬送GTPの課題として、床の渋滞で処理能力および保管効率に限界が訪れ、大規模化が難しい点が顕在化されたというのです。

加えて我が国では、大規模に棚搬送GTPを構築可能な広大な土地の取得は困難であり、倉庫は縦方向に拡大して行くしか手がないのが実情です。そこで次に3次元シャトル式自動倉庫システムを検討したものの、第一候補とされた海外製のソリューションは金額面で彼らの投資回収計画に合わず見送られることとなり、そうした課題を解決できるソリューションとして、新規の自動倉庫開発を、ベンダーに委ねる方針を新たに定め、当社にもお声



がけいただいたのがきっかけでした。

そこで求められたのは第一に「価格合理性」ですが、従来マテハンでは渋滞問題が原因で荷合わせ工程に長大なベルトコンベヤと専用の荷合わせ装置が必要であるのに対し、当社はハードウェア構成と配車最適化アルゴリズムにより渋滞を防ぎ、複雑な付帯設備が必要ないという点が最大の強みとなっております。

加えて、搬送のカギを握るシャトル自体も、縦横の水平移動のみに機能を限定していることから、上下動を伴う多機能の製品に比べて安価です。

渋滞しても作業者の荷待ち時間を極力減らすために、ステーションでシャトルが待機するタイプの製品もありますが、その方式ですとトータルのシャトル台数が増えることから顧客のコストアップにつながるという問題があります。RENATUSはステーション構成と渋滞しにくい構造によりこの問題を回避しています。こうした様々な合理的な基本設計を背景として、投資対効果を期待できる実用的なマテハンとなっております。

その他にも棚搬送GTPと比較して付帯設備が必要でないため、面積当たりの収納効率が格段に優れていて、昇降機は最高32mの高さでの稼働実績がある構成なので、立体的な格納効率も圧倒的に優れています。また、レイアウトの制約が少なく、斜め・砂時計型・L字型等々様々な形状に合わせた柔軟なレイアウト設計が可能な点もRENATUSのアドバンテージの1つです。

また、我々は導入費用および運営費用の両面で極限までメリットを追求するために前後工程まで含めた倉庫全体での最適化に繋がるご提案を行っております。

現時点で、西部電機(株)や(株)イー・ロジックと業務提携を発表していますが、今後もその他企業との連携を拡げ、事業を拡大していく方針です」

*

質疑応答の後に勉強会は終了、機種別委員会での会員企業講演を経て当日は閉会、解散となりました。

第3回 機種別部会・全体勉強会

生成AIの活用可能性を AWS様が基礎からレクチャー

人工知能、機械学習、深層学習、そして生成AI

2024年度の第3回機種別部会・委員会が9月5日(木)にAP東京八重洲(東京都中央区)にて開催されました。冒頭、横田専務理事より各種報告事項の説明があり、全体勉強会に移りました。

今回の全体勉強会のテーマは「基礎からわかる生成AI～生成AIの活用と可能性～」で、アマゾン ウェブ サービス ジャパン合同会社(AWS)技術統括本部 エンタープライズ技術本部 ストラテジック製造グループ 第三ソリューション部長の河井信彦氏が登壇、以下の要旨で講演されました。

*

AWS河井氏の講演は2部構成となっており第1部では生成AIの基礎的な説明、第2部はAWSの紹介となっていました。第1部の生成AIのパートでは「1.生成AIについて理解を深めよう」「2.自社データを活用した生成AIの活用」というアジェンダとなっており1.では従来の機械学習との違い、生成AIができる事とできない事、生成AIが得意なこと不得意なことなどの説明がありました。

生成AIはコンテンツ作成、文章作成(要約/翻訳/言い換え)、コードの生成、アイデア創出などが得意である一方で、正確な情報や最新情報が必要なケースや数学的な計算が求められるケースは不得意であり、生成AIの特徴を理解してユースケースを考えることが重要となります。

2.の自社データを活用する方法ではファインチューニング(元となる生成AIモデルに変更を加える方法)とRAG(検索拡張生成と呼ばれ元となる生成AIモデルに変更を加えない方法)の説明がありました。勉強会では具体的なRAGの構成について解説がありました。

RAGでは生成AIにリクエストを送信する前に自社内のデータを検索してその検索結果を元に生成AIで文章を作ることで、誤った情報を回答するリスクを低減できま



す。RAGを使う場合と使わない場合のデモが実施され、RAGを使ってJIMHの広報誌を検索することで「JIMHの活動内容を教えてください」という質問に対して適切に回答できていました。生成AIの仕組みや活用事例など重要な要素が詰まった内容でした。

第2部では河井氏が所属するAWSについて紹介されました。AWSはAmazonグループの会社でクラウドサービスを提供しています。Amazonグループは、地球上で最もお客様を大事にする事、最高の雇用主になる事、最も安全な職場を作る事、というミッションを掲げています。

Amazonは「地球上で最もお客様を大事にする事」を実現するために顧客体験から逆算してサービスを考えるWorking Backwardsというイノベーションのメカニズムを持っており、AWSでも同様のカルチャーを継承しています。AWSは、2006年からクラウドビジネスを開始し、2011年に日本にデータセンターを開設しました。今日では245の国と地域において、グローバルでは数百万、日本でも数十万を超えるお客様に利用されているクラウドサービスです。

また、AWSの技術、専門知識、プログラムなどを活用して、顧客向けのソリューションとサービスを構築するAWSパートナーネットワーク(APN)というコミュニティがあります。

AWSは、これまでに134回以上の値下げを実施しており、その利益を顧客に還元しているという点も強みの1つであると説明されていました。

*

質疑応答の後に勉強会は終了、機種別委員会での会員企業講演を経て当日は閉会、解散となりました。

物流危機とシンクロするように受講生も増加 将来に向けてメンバー同士の協調と連携を



問題発見・解決の技術、IEとVEを身に付けて

9月4日(水)、第14期マテハン塾の基調講演および特別講演がAP東京八重洲(東京都中央区)にて開催されました。冒頭、教育研修部会の藤井部会長より、以下の要旨で挨拶がありました。

「ここに出席の皆さんは常日頃、物流と呼ばれる業界で仕事している方々です。新聞、TVで物流という言葉を見かけない日はないような2024年に、このマテハン塾は第14回を迎えます。昨年までの卒業生は647人に至っており、特に一昨年は1年間で104人、昨年は91人と、ここ最近の受講者増加の傾向は極めて顕著で、そうした部分でも物流そして中でもマテリアルハンドリングという存在が非常にクローズアップされてきた時代になったことを痛感します。

本日の吉本先生の基調講演、さらに日本郵便の五味様の特別講演は非常に興味深い内容で、普段はなかなか聞けないお話に接することのできる貴重な機会でもありますので、集中して受講してください。

今日をスタートに11月中頃まで、これから約2か月半の間に、皆さんが吸収できることが一つでも多くあることに加えて、将来に向けて、このメンバーで今後も繋がる事が出来ることにも期待しています」

*

挨拶に続いて、早稲田大学名誉教授の吉本一穂氏が登壇し「MHをめぐる環境とシステム思考～MH塾受講にあたって～」のテーマで基調講演、概要は以下の通りです。

「私の専門は施設設計画、ロジスティクス設計で、生産管理、現場改善等を取り扱っています。ロジスティ



吉本氏の講演の様子

クス関係プロジェクトとしては工場の立地選定から、倉庫の規模の設計、運用、倉庫の算定、倉庫内の自動設計のプログラミング、トラックルートの最適設計等があげられます。

『生産拠点や物流拠点内の原材料、仕掛り品、完成品のすべての移動に関わる取り扱い』これがマテリアルハンドリングの定義です。マテリアルハンドリングの範囲でロジスティクスと生産のつながりを考えると、納入リードタイムやABC分析に基づくオーダー特性、種類、サイズ、温度帯等のSKU、出荷指示や許容リードタイム等の情報、トラック種類やサイズ等の輸配送設備、こうした要件を考慮してマテリアルハンドリングの設計をしていくのが皆さんの仕事であり、その基礎的な知識を纏めようというのがMH塾の基調講演、内容だとして理解いただきたい。

ところで皆さんの参加されるマテハン塾のカバーする範囲は、設計・生産・調達・販売・運用・管理・メンテまでを行うマテハン設備、あるいはマテハンのシステムにまで至り、ここまでを身に着けることが皆さんの役割であって、マテハン塾の内容だとして理解しています。

では倉庫の現場の中で何が行われているのかというと、まずサプライヤーの部品資材の物流センターから、調達物流の形で倉庫にモノが入って来ます。入って来たならば荷受、受け入れ検品、開梱、荷姿変更しておいてから倉庫内に入れる。生産現場に必要なラインサイドの生産要件、あるいは部品置き場仕掛置き場に対して、払出の検品、出庫、ピッキング、配膳してモノを払い出す供給。逆に生産現場でモノが造られたならば、入庫検品して倉庫内に入れる、倉庫内に入ったモノを今度は販売物流としてサプライチェーンにつないでいくための出荷検品、梱包、荷姿変更、荷揃え、出荷業務等々があります。

これらについてのしっかりとした理解ができていなければ、そもそもシステム設計はできないのだという

こと。従って、皆さんはけっこう大変なことを学んでいるのだということをまず理解していただきたい。

例えばクルマの部品展開してみると、絶対に必要な機能部品と、あってもなくてもいい付加機能部品の二つに分かれる。エンジン、ハンドル、タイヤは基本機能でなくてはならないが、カーステアやエアコン、ルーフウィンドウは無くても安全に走ることはできるといった違いであり、この基本機能を充実させることが生産現場の第一義だとする立場がVE(価値工学)です。

価値工学における定量的評価は、 $V = F/C$ で表され、Vは価値指数、Fは顧客の機能評価額、Cはライフサイクルコストをそれぞれ表し、計算の結果Vが1になったとき初めて顧客満足度が得られ、購買意欲が生まれると考えられます。

とりわけこれからの時代に、全体的な視点では、フィジカルインターネットという大きな流れの中で我々は業務に取り組み、様々な判断を下していく必要があります。そのためにもここで学ぶIE、VEという問題発見・解決の技術、これこそがマテハン塾の基本になる考え方のだと理解していただき、今後のマテハン塾の活動に繋げていただきたいと思います」

150年を超える歴史の中P-DXによる改革に挑戦

基調講演に続いては、日本郵便株執行役員の五味儀裕氏が登壇し「日本郵便のロジスティクス事業戦略」のテーマで特別講演、概要は以下の通りです。

「日本郵政グループは持ち株会社と事業会社3社の合計4社からなる体制で、日本郵便は郵便物流事業の他、ゆうちょ銀行や、かんぽ生命の事業の窓口業務、さらには不動産事業も含めて手掛けています。

元々は前島密が創設した明治4年にまでさかのぼりますので、今年は創業153年目にあたります。様々な変遷を経た中でも、2007年の郵政民営化はとりわけ大きなものでしたが、その後もそろそろ20年近くが経過しようとしています。

当社が日本全国に抱えているイン



五味氏の講演の様子

フラは郵便局で約2万4000局、郵便ポストは18万本あって、今この瞬間も、19万人の社員のほぼ半数の10万人が集配周りやハブ拠点で動いており、バイク8万5,000台、軽4輪3万台の巨大なネットワークを有しています。

とはいえ、郵便物流事業全体ではどんどん郵便の量が減ってきており、2001年をピークに260億通あった郵便物が年に2%ずつ減り続け、約24年が経過した今、約半分程度になったのが現状です。

ただこの郵便物の減少傾向も、外国に比べると非常に緩やかな減りだと言われていまして、個人向けやDMは諸外国と似た動きながら、行政関係の郵便、G2CとかC2Gと呼ばれるものが特徴的なのですが、これが仕組みとしてハンコや行政手続きは紙で残す文化が根強く、この20年間はほとんど減らなかったことがその一因と言われています。

また、当社の場合は郵便物が減っていく一方でモノ自体を運んでいるネットワークがありまして、ECを含めた宅配便需要が比較的強く、ゆうパケット等、郵便から荷物物流の方に事業のポートフォリオ自体をシフトしてきている傾向があります。

一方でコロナ禍をきっかけに行政手続きも大きくデジタル化され、デジタルで出来ない手続きはなくなってきており、郵便の減少は急加速してきており、2023年の直近決算では6%ほどの減少と、デジタル化、アフターコロナの世界では事業構造のシフトとより速いスピード化が求められています。

こうした状況下で我々はP-DX(ポスタル・デジタル・トランスフォーメーション)と呼んでいるデータドリブンによる郵便・物流事業改革に取り組んでいます。

長い歴史の中で事業の曲がり角に来ている当社ですが、様々なDX取り組み、データ活用領域でのデータビジネス、他社との協業、ロジスティクス分野での新規ビジネスの挑戦等々チャレンジ重ねる中で、日本全国津々浦々に張り巡らされたネットワークを次の世代に引き継ぎ、お客様に付加価値を提供し続けられる存在になるべく、チャレンジを続けて行きます」

*

当日のプログラム終了後は会場を移して懇親会が催され、活発な交流の後、閉会となりました。

タイ物流システム 机器人材育成支援事業への協力

取り組みの成果として タイの地で第1回MHE開講



コロナ禍の2022年にスタートし、主に当協会の教育研修部会が中心となって進めて来たタイ王国との連携取り組みの成果として、このたび海外におけるマテハン塾ともいえる記念すべき第一回のマテハン講座が同国のバンコクにおいて開講されました。そこで、これまでの経緯と今後の計画についてご報告致します。

1) これまでの主な活動

2022年度：タイマテハン講座に係る運営団体、講師候補者の選定、現地出張、進め方検討、他

2023年度：TNSC (Thai National Shippers' Council) 講師への教育資料作成、現地出張およびWEBによる教育支援、他

2024年度：タイ現地出張(4回)によるTNSC講師への教育支援、WEBによる教育支援、他

9月27日～10月26日『第1回MHE (Material Handling Equipment)』開講

2) MHEプログラム

運営団体であるTNSCによる第1回MHEの全体プログラム構想は以下図表の通りです。

日付	内容
24/9/27(金)	開会式、Module 1: マテリアルハンドリング(MH)の基礎
24/9/28(土)	Module 2: 入庫業務、Module 3: 出荷検査業務
24/10/4(金)	Module 5: フォークリフト、Module 8: 情報システム
24/10/5(土)	Module 7: 無人搬送車/ロボット、Module 6: 仕分・ピッキング
24/10/18(金)	企業見学: Boonthavorn Retail Corp.-Distribution Center Ransit
24/10/19(土)	Module 4: 情報システムの動向と事例
24/10/25(金)	企業見学: ① Bangkok Cold Storage Service, Ltd. ② Hafele Logistics Center
24/10/26(土)	MHEグループワーキング・ディスカッション
24/11/1(金)	修了試験
24/11/2(土)	発表会
25/2/28(金)	JIMH講演、修了式

3) MHE開会式ミニREPORT

記念すべき第一回MHE開会初日である9月27日(金)には、当協会からも現地会場(バンコク THE BERKELLY HOTEL)へ参列し、講義に先立って開会式が執り行われました。

開会式は冒頭、TNSCのChaichan会長より開会挨拶



講義会場

、続いてAOTSバンコク、JIMHよりそれぞれ祝辞が述べられ、参加者全員の記念写真撮影を終え、9時30分から本番の講義がスタートしました。

当日の受講者は総勢43名。その内訳は産業振興局(省庁)1名、講師推薦企業・団体7名、TNSC会員企業29名、さらには在タイ日系マテハン機器製造/販売企業5社からも6名の参加があったとのこと。

4) 今後の活動

- ・2024年11月 次回第2回MHE実施に向けた残課題の教育支援(WEBトレーニング)

- ・2024年12月2回、25年1月1回のWEBトレーニング

- ・2025年2月25日～3月1日：タイ現地出張による第1回MHE修了式への出席と打ち合わせ。

なお当協会では今後も、「MHE」の2025年度以降の講座定着化と講座内容の充実のための課題を抽出し、出来る限りの支援を実施する方針です。



講師・関係者集合写真

中国機械工程学会(CMES)来日

国際物流総合展時期に来日、 15年に及ぶ友好関係を確認



コロナ禍を経て5年振りの会議開催

国際物流総合展2024開催時期に中国機械工程学会(CMES)が来日され、9月12日(木)16時からヒルトン東京お台場3階オーキッドルームにてミーティングを行い、中国側からはCMES陸副理事長他6名が、日本側からはJIMH下代会長、横田専務理事、今村グローバル部会長他グローバル部会メンバー5名が参加しました。ミーティング冒頭、JIMH会長の下代博氏が以下の要旨で代表挨拶を行いました。

「中国機械工程学会は1936年の設立から88年の長きにわたり、中国の機械産業界を牽引されてこられました。その尽力が現在の中国の技術力・開発力の高度化に大きく寄与していることは紛れもないものと確信し、物流システム分野においてもその貢献度は高いものと拝察しております。昨日は、国際物流総合展を見学されたとうかがっております。今回の国際物流展は出展者数580社・団体と過去最大の規模で開催することができました。中国からも27社の出展となっております。今後も、物流システム業界に対する自動化ニーズは、世界中で高まると考えられます。グローバルな市場を舞台に、お互い切磋琢磨して物流システム業界を世界規模で盛り上げていきましょう。」

続いて、CMES副理事長である陸大明氏が以下の要旨で代表挨拶されました。



両会参加者による記念撮影

「JIMHとの日中物流技術交流会は、2009年のスタートからコロナ前の2019年まで面前で開催して来たものの、コロナ期間中は交流会を休止していました。今後はJIMHともっと交流を深めたいと考えています。国際物流総合展を見学して、展示会の規模が非常に大きくなっており、自動化設備の展示の中でも物流現場で実用化できる機器展示が特に多い点が印象的でした。現在の中国の物流事情では、特にAGV・AMRの進歩が著しく、その背景は自社の力と併せてスマート製造業の存在も背景にあります。中国での物流関連メーカーの数は増加傾向にあり、売上も成長しています。」



ミーティングの様子

ミーティングは続いて自己紹介の後にフリーディスカッションとなりました。概要は以下の通りです。

- ・中国の工業用ロボット市場は、物流市場のみで80億元(1,600億円)、参入企業は現在100社を超える。2023年度の販売台数は約4.9万台に上り、販売市場は日本だけではなく世界に広く展開している。

- ・「中国にはチャレンジ企業が多く若いメーカーがどんどん進出しているが、中国政府が支援しているのか?」との日本側質問に「政府の支援は無く基本は自由競争だが、金融業の支援はある」との回答。

- ・次回のWMHA4極会議は中国がホスト国の順番にあたるので、CeMAT Asia開催時に4極全てが面前で参加出来るようホスト国として努力したい。

フリーディスカッションの後、懇親会会場へ場所を移し、更に親交を深めました。

「中小企業省力化投資補助事業」にて製品カテゴリの登録、および個別製品登録審査と証明書発行業務を担っています

当協会では、「中小企業省力化投資補助事業」における、マテハン機器に関する製品の登録申請に関連する業務の一部を、経済産業省外局の中小企業庁より委託されていますが、それについてご報告致します。

1)「中小企業省力化投資補助金」の事業目的

「中小企業省力化投資補助金」とは、中小企業等の売上拡大や生産性向上を後押しするため、人手不足に悩む中小企業等に対して、IoT、ロボット等の人手不足解消に効果がある汎用製品を導入するための事業費等の経費の一部を補助するもので、これは簡易で即効性がある省力化投資を促進し、中小企業等の付加価値額や生産性向上を図るとともに、賃上げにつなげることを目的としています。



中小企業の手不足解消に効果のある「省力化製品」を導入するための補助金

中小企業 省力化投資補助金 補助率 1/2



中小企業省力化投資補助金とは、
人手不足解消に効果のある汎用製品を導入するための経費を国が補助することにより、簡易で即効性がある中小企業の省力化投資を促進し、売上拡大や生産性向上を図るとともに賃上げにつなげることを目的とした補助金です。

- 対象製品のリスト(カテゴリ)に登録された省力化製品から、自社の課題に合わせて製品を選択できます！
- 「販売事業者」が製品の導入を支援！申請・申請サポートします。
- 補助率は1/2！補助上乗額は従業員数ごとにより異なります。

中小企業省力化投資補助金パンフレット

2)当協会の実施内容について

当協会では、「中小企業省力化投資補助事業」の対象のうち「マテハン機器」に関する登録申請がなされた製品に関し、中小企業庁より承認を受けた「製品カテゴリ」に適合する製品であり、且つ「省力化」「省人

化」の基準を満たすか否かの確認・審査を行い、適格と判断された製品について「証明書」を発行いたします。

また、製品カテゴリについては現在、「AGV・AMR(無人搬送車)」「検品・仕分システム」「自動倉庫」の3つのカテゴリが登録済みですが、「マテハン機器」に関する製品カテゴリについて、随時新規カテゴリの登録申請を進めて参ります。(新規カテゴリ設定登録が完了後、随時お知らせ致します)

3)個別製品登録申請について

1.当協会公式サイトTOP「お知らせ」をクリック、もしくは<https://www.jimh.or.jp/certificate/>へ。



2.中小企業庁「中小企業省力化投資補助事業」の個別製品登録申請に係る証明書の発行について当協会の対応業務については、本ページの内容をご確認ください。

- ①製品登録の「審査料」について
- ②お問い合わせ及び申請窓口について
- ③証明書発行に要する期間について
- ④製品登録証明書発行手続きの流れ
- ⑤省力化製品・製造事業者の登録スキームについて

4)中小企業省力化投資補助事業の事務局サイトについて

「1.」項クリック後の画面において「中小企業省力化補助金「トップページ」」をクリック、もしくは<https://shoryokuka.smrj.go.jp/>へアクセスください。

ホームページでの確認	中小企業省力化投資補助事業 トップページ (外部ページに移動します)
中小企業省力化投資補助事業 コールセンター	ナビダイヤル：0570-099-660 IP電話等からのお問い合わせ先：03-4335-7555 お問い合わせ時間：9:30～17:30/月曜～金曜(土・日・祝日を除く)

◆ご不明点については、事務局へお問い合わせください。皆様からの製品登録申請をお待ち申し上げます。

【賛助会員】

サイレックス・テクノロジー株式会社



サイレックス・テクノロジー本社

ワイヤレス技術と組み込みノウハウをコアに、ハードウェア・ソフトウェア・クラウド製品を提供する研究開発型企業です。Wi-Fi、ローカル5G、Wi-FiHaLow™などのネットワーク製品や無線環境の監視・最適化が可能クラウドソリューションを通じて、医療・産業向けの製品とサービスを提供しています。

住所：京都府精華町光台二丁目3番地1
電話：0774-98-3781
公式サイト：<https://www.silex.jp>

2025国際ロボット展

INTERNATIONAL ROBOT EXHIBITION 2025

- テーマ** ロボティクスがもたらす持続可能な社会
- 会場** 東京ビッグサイト
東4～8ホール、西1～4ホール、アトリウム
- 会期** 2025年12月3日(水)～6日(土)
10:00～17:00
- 主催** 一般社団法人日本ロボット工業会
日刊工業新聞社
- 協賛** 関連約35団体(予定)
- 公式HP** <https://irex.nikkan.co.jp/>

2025国際ロボット展併催『物流システム・ロボットゾーン』出展社募集中！

物流業界では人手不足を背景に、ロボット・IoTを活用したマテリアル・ハンドリング機器の進化により、自動化、省人化、標準化が加速しています。成長著しい市場との相乗効果を発揮すべく、『物流システム・ロボットゾーン』を企画。国際ロボット展内で共催出展を行います。

- 出展対象**
 - 仕分け装置・ソーター ●包装機器・システム
 - 情報機器・システム ●保管・ピッキングシステム
 - AGV・GTP・AMR ●搬送機器・システム
 - 各種周辺装置部品 他
- 主催** 一般社団法人 日本物流システム機器協会



2023国際ロボット展開会式

編集後記

■お蔭さまで2024年最後となる第14号を発行することができました。ご協力頂いた事務局・編集チームの皆さまに御礼申し上げます。
■長い猛暑が過ぎ、ようやく冬めいた季節となりました。突然の寒さの訪れで、体調を崩す方もちらほら。不摂生を控えてご自愛くださいませ。
■さて、波乱の幕開けだった1年も

終わりを迎えようとしています。皆様にとってどんな1年であったでしょうか。2024年問題を初め、我々を取り巻く環境としては話題の多い1年であったと思います。
■協会の事業活動も順調に推移し、新しい年を迎えようとしています。皆様におかれましても、どうぞ良いお年をお迎えください。(F)

一般社団法人 日本物流システム機器協会
広報誌「JIMHニュース」第14号
2024年11月30日発行
〒104-0032 東京都中央区八丁堀3-3-2
スギコビル2階
TEL 03-6222-2001 FAX 03-6222-2005
<https://www.jimh.or.jp/>

